

南宋包恢の陸九淵評価

—「三陸先生祠堂記」精読（上）—

中嶋 諒

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

1. はじめに

中国南宋前期に生きた朱熹（朱子、1130～1200）は、その論敵として知られる陸九淵（象山、1139～1192）と直接に、あるいは長大な書簡をもって激しい論争を繰り広げた。けれども南宋後期、彼らの再伝の弟子たちが活躍した時代においては、かえって朱陸双方の思想を接近させていこうとする、いわゆる「朱陸折衷」と称される思想潮流が現れた。本稿で取り上げる包恢（宏斎、1182～1268）も、「朱陸折衷」を体現した思想家である。筆者はかつて、この包恢の「朱陸折衷」論について簡介し、また包恢の文集『敝帚稿略』所収の「象山先生年譜序」（他2篇）を通じて、その「朱陸折衷」論のうち、とりわけ「陸（九淵）」の側面について分析したことがある。

さて包恢の著述は、いま『四庫全書』等に収める『敝帚稿略』8巻にまとめられているが、そこに採られていない佚文もいくつか存在する。例えば、陸九淵の「年譜」（『陸九淵集』巻36所収）末尾には、「旌表陸氏門記（旌表門閭記）」、及び「三陸先生祠堂記」と題する、包恢が陸九淵（とその兄九韶、九齡）について著した文章が掲載されているが、これらはいずれも『敝帚稿略』には収められていない。そこで本稿では、まずは「三陸先生祠堂記」の前半部を取り上げ、それを精読することを通じて、包恢の陸九淵評価について、さらに掘り下げて考察していきたい。なお紙幅の都合上、「三陸先生祠堂記」の後半部と「旌表陸氏門記」の検討については、別の機会に譲ることとする。

ところで「年譜」所収の「三陸先生祠堂記」の末尾は、「云」の一字で締め括られている。ただ「三陸先生祠堂記」は、『（雍正）江西通志』や『（光緒）撫州府志』、『（乾隆、同治）臨川県志』等の地方志にも引かれており、これらは「年譜」所収のものとは比して、末尾にさらに百余字の文章が続く。またその冒頭部分は、両者にいくらか異同があるが、大まかに言えば、「年譜」所収のものにはない文言が見られるなど、地方志所引のものの方がより詳細であるとの印象を受ける。そこで本稿は、『（光緒）撫州府志』に依拠した『全宋文』第319冊（上海辞書出版社、2006年5月）所収の「三陸先生祠堂記」（370～374頁）を底本とし、併せて「年譜」（『陸九淵集』、中華書局、1980年1月／529～533頁）との校異を示すこととした。

〔注〕

- (1) 拙稿「南宋包恢の「朱陸折衷」論」(『新しい漢字漢文教育』65、2017年11月)。
- (2) 拙稿「南宋包恢の陸九淵評価：「象山先生年譜序」(他二篇)精読」(『実践女子大学CLEIPジャーナル』4、2018年3月)。
- (3) 『敝帚稿略』の諸本については、注(2)所掲の拙稿を参照。

2. 「三陸先生祠堂記」精読(上)

【凡例】

- 底本には『全宋文』第319冊(上海辞書出版社、2006年5月)を用い、『陸九淵集』(中華書局、1980年1月)との校異を示した。ただし煩を避けるため、異体字・通假字・同義語の類の異同は割愛した。また句読点等の符号は、適宜改めた箇所がある。
- 訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。なお注釈の引用文中や通釈で()を附したのは、訳者の補注である。また[]は、原文に附された小字注、または割注にあたる。なお原文・校異は基本的に本字を用いたが、注釈・通釈では新字を使用した。
- 注釈において、『象山先生文集』(『象山先生全集』巻1~32にあたる)、『象山先生語録』(上が『全集』巻34に、下が『全集』巻35にあたる)、『象山先生年譜』(『全集』巻36にあたる)を引用する場合には、それぞれ「文集」、「語録」、「年譜」の略称を用いた。また引用に際しては、前掲『陸九淵集』を使用し、その頁数を併記した。

三陸先生祠堂記〔淳祐十一年三月〕

以正學名天下、而有三先生焉、萃在一郡一家、若臨川陸氏昆弟者、可謂絕無而僅有歟。梭山寬和凝重、復齋深沉周謹、象山光明俊偉。此其資也、固皆近道矣。若其學之淺深、則自有能辨之者。⁽¹⁾梭山篤信聖經、見之言行、推之家法、具有典刑。雖服先儒之訓、而於理有不可於心者、決不苟徇。如太極圖說以無極乃老氏之學、周子通書與二程俱未嘗言及無極二字、以此見三公皆知其爲非、此其所見之卓過於人遠矣。象山與迺兄固多未合、獨此深相契、則其學可知矣。惜其終於獨善、而不及見諸行事之著明爾。⁽³⁾復齋少有大志、浩博無涯涘、觀書無滯礙、繙閱百家、晝夜不倦。自爲士時、已有稱其得子思孟軻之旨者。⁽⁴⁾其後入太學、一時知名士咸師尊之、則其學可知矣。又惜其在家在鄉、則僅可見者、輔成家道之修整、備禦湖寇之侵軼。^{d e}其先爲學錄、後爲教官、則雖可見者紀綱肅而蠹弊之悉革、誠意孚而人心之興起、然其爲海內儒宗、道德係天下之望、而恨未得施其一二爾。若夫象山先生之言論風旨、發揮施設、則有多於二兄者。蓋自幼時^{i (5)}已如成人、淵乎似道、有定能靜、實自天出、不待勉強。⁽⁶⁾故其知其生知、行若安行、粹然純如也。蓋學之正非他、以其實而非虛也。故先生嘗曰、宇宙間自有實理、此理苟明、則自有實行、有實事。實行之人、所謂不言而信。又自謂、平生學問惟有一實、一實則萬虛皆碎。嗚呼、彼世之以虛識見、虛議論、習成風化、而未嘗一反己就實、以課日進月新之功者、觀此亦嘗有所警而悟其非乎。⁽⁸⁾

〔校異〕

- a 如太～知矣…此の 70 字無し。 b 軻…「子」に作る。 c 則…此の字無し。 d 軼…「軌」に作る。
 e 其先～見者…此の 14 字無し。 f 其…「而」に作る。 g 係…「繫」に作る。 h 爾…「耳」に作る。
 i 自…此の字の後に「其」が入る。 j 其…「若」に作る。 k 行…此の字の前に「其」が入る。
 l 正…此の字の後に「而」が入る。 m 月…「日」に作る。

〔注釈〕

- (1) 梭山篤信～具有典刑…「梭山」は、陸九淵の四兄陸九韶（1128～1205）を指す。いまは佚して伝わらないが、『梭山日記』と題する文集があった。「年譜」冒頭（480 頁）に「（九韶）有文集曰梭山日記。中有居家正本及制用各二篇」とある。なお「居家（正本）」「制用」と題する二篇の文章のみ、陶宗儀『説郛』に収められたため、いまに伝わっている。これらは『宋元学案』巻 57「梭山復齋学案」や、『陸子学譜』巻 5「家学」等にも採録されており、また同治 10 年（1871）陸邦瑞刊『陸象山先生全集』等に「陸梭山公家制」として附刻されている。
- (2) 如太極～無極二字…いわゆる朱熹との無極太極論争を指す。朱熹が校定した周敦頤『太極図説』冒頭の一句「無極而太極」の「無極」の語に対して、陸九韶が疑義を呈したもの。「文集」巻 15、「与陶賛仲」1（192 頁）に「太極図説、乃梭山兄弁其非是、大抵言無極而太極是老氏之学、与周子通書不類。通書言太極不言無極、易大伝亦只言太極不言無極。若於太極上加無極二字、乃是蔽於老氏之学」とある。淳熙 15（1188）年以後は、陸九淵も参観している。「文集」巻 2「与朱元晦」、また『朱文公文集』巻 36「答陸子美」、及び「答陸子静」を参照。
- (3) 復齋少有～晝夜不倦…「復齋」は、陸九淵の五兄陸九齡（1132～1180）を指す。「年譜」冒頭（480 頁）に「（九齡）少有大志、浩博無涯涘」とある。その著述をまとめた『復齋文集』6 巻は伝わらないが、『黄氏日抄』巻 42 にその佚文が収められており（『宋元学案』巻 57「梭山復齋学案」などにも採録）、ここからその思想の一端が垣間見える。
- (4) 其後入～咸師尊之…陸九齡は、乾道 2 年（1166）に行都臨安の太学の学録（末端学者）となり、後に甬上四先生と称される楊簡、袁燮、舒璘、沈煥らを教えている（これについては、市来津由彦氏『朱熹門人集団形成の研究』第二篇・第二章・第一節「乾道・淳熙における士大夫思想交流」（創文社、2002 年 2 月）に詳しい）。
- (5) 自幼時已如成人…「年譜」紹興 12 年（1142・先生 4 歳／481 頁）条に「静重如成人」とあるのを踏まえる。
- (6) 有定能静…『大学』に「知止而后有定、定而后能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得」とあるのを踏まえる。
- (7) 其知～若安行…『中庸』に「或生而知之、或学而知之、或困而知之、及其知之一也。或安而行之、或利而行之、或勉强而行之、及其成功一也」とあるのを踏まえる。
- (8) 宇宙間～不言而信…「文集」巻 14、「与包誦道」（182 頁）に「宇宙間自有実理、所貴乎学者、為能明此理耳。此理苟明、則自有实行有实事。实行之人、所謂不言而信、与近時一種事唇吻閑図度者、天淵不侔、燕越異向」とある。なお「不言而信」は、『周易』繫辭上に「黙而成之、不言而信、存乎德行」、『中庸』に「故君子不動而敬、不言而信」とあるのなどを踏まえ

る。

- (9) 平生學問～萬虚皆碎…「語類」上・29条（傳子雲録／399頁）に「千虚不博一実、吾平生學問無他、只是一実」とある。

〔通釈〕

三陸先生祠堂記〔淳祐11年（1251）3月〕

正しい学問によって天下にその名が知られ、同じ土地、同じ家に集まった三人の先生、江西臨川の陸家の兄弟は、類い稀なる者たちだというべきであろう。陸九韶（梭山）は穏やかで重厚、陸九齡（復齋）は思慮深く慎重、陸九淵（象山）は輝かしく偉大であった。彼らの資質は、もとよりみな道に近いものであったが、学問の深淺については、おのずと区別することができる。

陸九韶（梭山）は、篤く聖賢の書を信じ、それを己が言行にあらわし、家法へと推し上げたが、そこにはつぶさに規範が備わっていた。先儒の訓戒に敬服してはいたが、理に適っていても心に適わないものには、決して迎合しなかった。『太極図説』について、「無極」は老子の学であり、また周敦頤『通書』や二程（程顥、程頤）の書はいずれも「無極」の二字に言及していないことから、三人はみな（「無極」という語の）間違いを分かっていた。この卓見たるや、人を遥かに抜きんできたものであろう。陸九淵（象山）は、この（陸九韶）兄と、もとより合致しないところは多かったが、根本たるところで一致していたので、その学は知れ渡っていたといえる。ただ惜しむらくは（他人に知られることなく）一人で行うことに終始していたため、諸々の事績が明らかでない。

陸九齡（復齋）は、若くして大志を抱き、広々として限界（を設けること）がなく、書物を読むにも滞りなく、百家を紐解いては、昼夜飽くことがなかった。士子（科挙の受験者）の頃より、すでに子思や孟子の旨を会得していると称えられていた。その後、太学に入ってから、名士らがみな師として仰ぎ、その学問が知れ渡っていたこともあった。しかし残念ながら、郷里にあって僅かに伝わっているのは、家道の再興を図り、外敵の侵攻に備えたことのみである。また先に学録（太学の末端学者）となり、その後教官となった際に伝わっているのは、綱領を厳粛にして弊害を改め、誠意を学育して人心を興し、天下の大儒者となり、道徳が天下の待望するところとなったが、恨むらくはその一、二すらも実行できなかった。

陸九淵（象山）先生の言説や風格については、広く発揮されることが、（陸九韶、九齡）両兄よりも多かった。思うに幼少の頃より、すでに成人のごとく、道のように深々としており、安定して心は静やか、まことに天より現れ出たがごとく、勉強することを俟たなかった。それゆえ知は生まれながらに知り、行は安んじて行い、純然たるあり様であった。やはり正しい学とは、他でもない、実であって虚ではないことである。だから陸九淵先生は「宇宙にはおのずと実理があり、もしもこの理が明らかであれば、おのずと実行されて実事がある。実行する人は、いわゆる「言わずして信ある」ものである」といい、また自ら「日ごろの学問には、ただ一実があるのみで、一実があれば万虚はみな粉碎する」といつていた。ああ、世にあふれる空虚な見識、空虚な議論が習慣となって、己を省みて実に向かうこともなく、ただ日々の進歩をもとめる者どもが、その非を悟ることなどあるのであろうか。

夫道不⁽¹⁾虚行、若⁽²⁾大路然、苟得實地而實履之、則起自足下之近、可達千萬里之遠。如曰涓流積至滄溟、拳石崇成太華、亦由是爾。故自仁之實推而至於樂之實、自有樂生鳥可已之妙。其實可⁽⁵⁾欲者善也、實有諸己者信也。由善信而充實有光輝焉、則其實將益美而大、是誠⁽⁶⁾之者人之道也。由大而化則爲聖、而入於不可知⁽⁷⁾之神、是誠者天之道也。此乃孟子之實學、可以漸積而循至者。然而無有乎爾、則亦久矣。先生嘗論學者之知至、必其智識能超出乎千五百年間名世之士、而自以未嘗少避爲善之任者、非敢奮一旦之決、信不敏之意、而徒爲無忌憚大言也。蓋以其初、實因深切自反、灼見善非外鑠、徒以交物有蔽、淪胥以亡、自此不敢自棄。是其深造自得實自孟氏、故曰孟氏之後至是始一明、其誰曰不然。四方聞其風采、學者輻輳。先生明於知人、凡所剖決必洞見肝肺、所鍼砭必中其膏肓、以是隨所發明、類有感動、覺其良心而知其正性者爲多。然則其學眞可質鬼神而無疑、俟聖人而不惑者矣。昭昭如是、豈其間有所疑惑焉。殆若不可曉者、是又烏得不因以致其辯歟。

〔校異〕

a 萬…此の字無し。 b 如曰～是爾…此の18字無し。 c 鳥…「惡」に作る。 d 之…此の字の後に「之」が入る。 e 以…此の字無し。 f 積…「進」に作る。 g 循…「馴」に作る。 h 乎…此の字無し。 i 氏…「子」に作る。 j 氏…「子」に作る。 k 采…「來」に作る。 l 見…此の字の後に「其」がある。 m 鍼…「箴」に作る。 n 必…此の字の後に「的」がある。 o 以是～明類…此の7字無し。

〔注釈〕

- (1) 道不虛行…『周易』繫辭下に「初率其辭而揆其方、既有典常、苟非其人、道不虛行」とある。
- (2) 若大路然…『孟子』告子下に「夫道若大路然、豈難知哉、人病不求耳」とある。
- (3) 涓流積至～成太華…乾道8年(1175・先生37歳)、陸九淵と朱熹との初の直接対決となる、いわゆる鵝湖の会に際して詠まれた七言律詩の頷聯を踏まえる。同行した五兄陸九齡が詠じた詩に次韻したもの。「文集」巻25、「鵝湖和教授兄韻」(301頁)に「墟墓興哀宗廟欽、斯人千古不磨心。涓流積至滄溟水、拳石崇成泰華岑。易簡工夫終久大、支離事業竟浮沈。欲知自下升高處、真偽先須弁只今」とある。またこの詩は「語録」上・203条(427頁)にも採録される。
- (4) 自仁之實～可已之妙…『孟子』離婁上に「仁之實、事親是也。義之實、從兄是也。智之實、知斯二者弗去是也。禮之實、節文斯二者是也。樂之實、樂斯二者、樂則生矣。生則惡可已也。惡可已、則不知足之踏之、手之舞之」とあるのを踏まえる。
- (5) 可欲者～不可知之神…『孟子』尽心下に「可欲之謂善、有諸己之謂信、充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神」とあるのを踏まえる。
- (6) 誠之者人之道也・誠者天之道也…『中庸』に「誠者、天之道也。誠之者、人之道也」とある。
- (7) 然而無有乎爾…『孟子』尽心下に「近聖人之居、若此其甚也、然而無有乎爾、則亦無有乎爾」とある。
- (8) 先生嘗論學者之知至…「知至」(至るを知る／知至る)は、『周易』乾卦・九三に「知至至之、可与幾也。知終終之、可与存義也」とあり、また『大学』に「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、身修而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平」とある。陸

九淵はこの「知至」について、「文集」巻7、「与彭子寿」(91頁)「易言、知至至之、可与幾也。知終終之、可与存義也。大学言、物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後身脩。……皆是聖賢教人、使之知有講学、豈有一句不実頭」や、「語録」下・386条(黄叔豊録/477頁)「知至知終、皆必由学、然後至之終之」など、学の必要性を説くときに好んで用いる。

- (9) 未嘗少避～不敢自棄…「文集」巻3、「与諸葛受之」(45頁)に「某自承父師之訓、平日与朋友切磋、輒未嘗少避為善之任。非敢奮一旦之決、信不遜之意、徒為無顧忌大言。誠以疇昔親炙師友之次、実深切自反、灼見善非外鑠、徒以交物有蔽、淪胥以亡、大發愧恥。自此鞭策驚蹇、不敢自棄」とある。
- (10) 其深造～是始一明…「語録」下・338条(詹阜民録/471頁)「年譜」淳熙12年(1185・先生47歳)条とほぼ同一記事/498頁)に「某嘗問、先生之学亦有所受乎。曰、因讀孟子而自得之」とあり、また「文集」巻11、「与路彦彬」(134頁)に「区区之学、自謂孟子之後至是而始一明也」とあるのなどを踏まえる。なお「深造」「自得」の語は、もと『孟子』離婁下「君子深造之以道、欲其自得之也」に見える。
- (11) 其學眞～不惑者矣…『中庸』に「君子之道本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不謬、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑」とあるのを踏まえる。また「文集」巻15、「与陶贊仲」2(194頁)に「吾所明之理、乃天下之正理、実理、常理、公理、所謂本諸身、証諸庶民、考諸三王而不謬、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑者也」とある。

〔通釈〕

そもそも「道は虚行せず」、「大路の若く然り」である。もしも実なるところを得て、それを実践するならば、足もとの近きより、遙か千万里へと到達することができる。(陸先生の詩にいう)「涓流積みて滄溟(の水)に至り、拳石崇くして泰華(の岑)と成る」(ちよろちよろとした流れが合わさって大海となり、拳ほどの小石が積み重なって泰山や華山のような大峰となる)というのもこれによる。それゆえ(『孟子』離婁上にいうように)(親に仕えるという)仁の実から推し^{かく}上げ、樂の実へと到達し、楽しみが生じたならば、どうして止めることができようか。また実とは、(『孟子』尽心下にいう)「欲すべき(を之れ)善(と謂ふ)」であり、「諸を己に有つ(を之れ)信(と謂ふ)」である。この「善」や「信」より「充実する(を之れ美と謂ふ)」、また「光輝有る(を之れ大と謂ふ)」に至って、「美」や「大」となるが、これが(『中庸』にいう)「之を誠にするは人の道なり」である。「大にして(之を)化する(を之れ)聖(と謂ふ)」、「(之を)知るべからざる(を之れ)神(と謂ふ)」が、(『中庸』にいう)「誠は天の道なり」である。これが取りも直さず、孟子の実学であり、次第に(涓流が)積みあがり、それに従って(滄溟の水に)至ることである。

けれども(『孟子』尽心下にいうように)(孔子の没後)これを後世へ残すものがいなくなって久しい。かつて陸先生は、学ぶ者の「知至」について論じたが、その知識は必ず(孔孟の没後)千五百年間の名士たちに抜きん出ている。また(陸先生は)自ら次のようにおっしゃっている。「いまだ善を為すという責任から逃れたことはなく、一時しのぎの決断で、愚かな考えを信じ込み、いたずらに高慢不遜な大言を放ったこともない。それはやはりかつて、(自らに備わる)明らかなる

善は、外界からメッキされたものではないが、いたずらに外物と交わっては弊害があり、衰え減んでしまうと痛切に反省し、これより自暴自棄になることがなかったからである」。深く理解し自得するのに孟子をもってしたのであり、それゆえ（陸先生は）「孟子以後、ここに至って始めて明らかになった」とおっしゃったのだが、それに誰が異を唱えられるであろうか。四方よりその評判を耳にして、学ぶ者たちが集まってきたが、陸先生はその学友たちに、肝肺の位置を見抜いて解剖するように、膏肓に鍼を命中させるように、個々人に応じて発明し、みなに感動をもたらせ、多くのものが自らの良心をさとり、その正しさを理解した。そうであるならば、（陸先生の）学とは、まことに（『中庸』にいう）「諸を鬼神に質して疑ひ無く、百世以て聖人を俟ちて惑わず」である。明らかなることかくのごとく、どうしてそこに疑いをはさむ余地があろう。これが理解できない者は、どうしても正されなければならない。

且道義之門、自開闢以來一也。豈容私立門戶乎。故其說曰、宇宙即是吾心、吾心即是宇宙。曰、學者惟理是從、理乃天下之公理、心乃天下之同心、顏曾傳夫子之道、不私夫子之門戶、夫子亦無私門戶與人爲私商也。曰、此理在宇宙間、未嘗有所隱遁。天地所以爲天地者、順此理而已。人與天地並立爲三極、安得自私而不順此理哉。是先生之學、乃宇宙之達道明矣。而或者乃斥以別爲一門、何耶。釋氏之說、自開闢以來無有也。豈非橫出異端乎。故其說曰、取釋氏之聖賢、而繩以春秋之法、童子知其不免。曰、今若徒自形迹詞語間辨之、乃彼所謂職業、要其爲不守正道、無復有毫髮之近是者矣。曰、方士禪伯、眞爲太崇。無此迷惑、則無偏無黨、王道蕩蕩、其樂可量哉。是先生之學、非釋氏之邪說亦明矣。而或者指以爲禪學、又何邪。

〔校異〕異同なし。

〔注釈〕

- (1) 宇宙即～是宇宙…「文集」卷 22、「雜說」(273 頁)（「年譜」紹興 21 年（1151・先生 13 歳）条にも同一記事を採録／482 頁）に「宇宙便是吾心、吾心即是宇宙」とある。
- (2) 學者惟～爲私商也…「文集」卷 15、「与唐司法」(196 頁)に「学者求理、当唯理之是從、豈可苟私門戶。理乃天下之公理、心乃天下之同心、聖賢之所以爲聖賢者、不容私而已。顏曾伝夫子之道、不私孔子之門戶、孔子亦無私門戶、与人爲私商也」とある。
- (3) 此理在～此理哉…「文集」卷 11、「与朱濟道」1 (142 頁)に「此理在宇宙間、未嘗有所隱遁、天地之所以爲天地者、順此理而無私焉耳。人与天地並立而爲三極、安得自私而不順此理哉」とある。
- (4) 取釋氏～知其不免…「文集」卷 2、「与王順伯」1 (17 頁)に「試使釋氏之聖賢、而繩以春秋之法、童子知其不免矣」とある。
- (5) 今若徒～是者矣…未詳。管見の限り、陸九淵の「文集」、「語録」、「年譜」等に、これに類する句は見えない。
- (6) 方士禪伯～其樂可量哉…「文集」卷 20、「贈劉季蒙」(251 頁)に「方士禪伯、眞爲太崇。無世俗之陷溺、無二崇之迷惑、所謂無偏無黨、王道蕩蕩、浩然宇宙之間、其樂孰可量也」とある。
- (7) 或者指以爲禪學…陸九淵の学を禪学と見なす例は枚挙に暇がない。例えば『朱子語類』卷

124・43条（輔広録／中華書局、1994年3月、八・2978頁）に「陸子静（九淵）之学、自是胸中無奈許多禪何」、また『朱文公文集』卷35、「与劉子澄」11（『朱熹集』、四川教育出版社、1997年5月所収、三・1552頁）に「子静一味是禪」などがある。

〔通釈〕

さて道義の門は、天地開闢以来一つである。どうして門戸を私して立てるべきであろうか。それゆえ（陸先生の）おことばに「宇宙は我が心であり、我が心は宇宙である」、「学ぶ者は理のみに従う。理は天下の公理であり、心は天下の同心である。顔子、曾子は孔夫子の道を伝えたが、その門戸を私せず、孔夫子もまた門戸を私して、他人と私的に協議をすることはなかった」、「この理は宇宙にあって、決して隠遁することはない。天地が天地である理由は、この理に随っているということに尽きる。人と天地は並び立ち三極となるが、どうして私してこの理に随わないことがあるか」とある。これが陸先生の学であり、宇宙の達道は明らかである。

けれどもまた新たに別に一門を立てる者がいるのは何故であろうか。釈氏（仏者）の説は、天地開闢以来あったわけではない。何という異端の横行であろうか。それゆえ（陸先生の）おことばに「釈氏の聖賢を『春秋』の法によって糾^{ただ}してやれば、幼子であっても罪を免れられないと分かるであろう」、「いたずらに言葉巧みに論弁するのが、彼ら（釈氏）の生業であるが、結局、行いが正しい道を守ることなく、わずかにそれに近づくこともない」、「道士（道教の僧）と禅僧は、まことに高遠に過ぎるものである。彼らに惑わされることがなければ、偏頗も党派もなく、王道は広々として、その楽しみははかり知れない」。これが陸先生の学であり、釈氏の邪説でないこと（釈氏の邪説を非難していること）は明らかである。（陸先生の学を）禅学だと指摘する輩もいるが、それは何という間違いであろうか。